

〈研究ノート〉

閉鎖型循環生態系と発展型社会システムーハワイ日系人を中心に*

杉 山 貞 夫**

はじめに

この小論はあくまで研究ノートであって、経験に照らして現実の課題がどのように解釈できるかを探るための覚書である。1998年8月より私はハワイ大学医学部老年病学科で、自由な環境の下で勉強することができた。ここでは、かつて閉鎖型自然生態系であった環境が文明の進歩につれて変化・変質していく様相について考えてみたいと思う。勿論、この考えは未だ完結してはいない。現段階では、あくまで私の些細な経験と観察に基づいた推論である。

最初に、何故ここで文明と環境の関係を考えるのかを述べる。即ち、動機についてである。私は当初、人間というものに漠然とした興味を抱いていた。研究するにつれ専門は次第に自然科学や技術的な色彩をおびてきた。だが、専門化する程に頭の中にある人間像は抽象化され、中枢神経系や視覚系機能に収斂していく。あまりに分析的になりすぎると、全体が見えなくなる。そこで生活する人間、民族や文化を背景とした人間と云った視点に何時かは立ちかえてみたいという望みを持つにいたった。それを私に知らしめたのは、人間工学の研究であった。後に国際人間工学会連合で役職を務めた折、私の技術観には「文化や社会」へのこだわりがあったと覚えている。当時、ヨーロッパ主導による画一的な技術観には相当に抵抗し、機会をみては文化的要素の重視を説いたものであった。民族独特のステレオタイプ化した行動を修正し、画一化することは困難なことである。この修正には何世代にもわたる画一的な教育訓練

が必要である。この困難性は一概に文化に起因するとも云えないのだが、やはり人間は長い目で見ると文化や社会規範に適応してしまうようである。それにつけても昔の学者は偉かったと思う。私が帰国の折、ミシガン大学の Paul M. Fitts 博士は、自分の教えたものはアメリカ文化の中で育った体系であって、帰国後はしばらく日本の文化や日本人について考えるようにと諭された。一留学生に対し謙虚にこのような助言ができる教授が今時の大学にいらっしゃるかと反省するものである。以後約10年の間、私は視覚生理学の研究に没頭したものの、「日本人の習性」、更に「それを育む文化的背景」にこだわってきたのは彼のこの一言によってであった。

大学も定年で退き自由になった現在、個別の学体系にこだわらずにものを考えるにはこれらは恰好の題材であり、絶好の機会でもある。幸い私の領域の中には閉鎖生態系生命維持システムの研究があるので、この考え方に則して観察研究を試みた。他領域の専門家からみれば、あるいはさまざま指摘すべきことがあるかも知れないが、あくまで私個人の観察結果なので、この点ご容赦いただきたい。

たまたま1999年夏ハワイ大学医学部老年病学科とクアキニ医療センターの主催する Hawaii Pacific Gerontechnology 会議に主催者の一人として参加することができた。その会議後、筆者の視点から、自然生態系の劣化傾向、社会の変質過程、人間の世代といった時系列的な観点から、閉鎖循環型環境が次第に西欧化する過程で発生する諸問題について、特に日本人から日系人への移行過程を例にとって私見をまとめることにした。

*キーワード：閉鎖型循環生態系、発展型社会システム、社会の変質、人間の習性、社会規範と価値観

**関西学院大学名誉教授・ハワイ大学医学部老年病学科客員教授

自然生態系から社会生態系への移行 —生命維持システムの変化

米国ハワイ州は太平洋に浮かぶ火山性の大小の島嶼からなり、環境的には閉鎖生態系と云ってよい。人類が移住する以前は、動植物のみの自然生態系であったはずである。何処からか、何時の頃からか人類はこの島嶼に移住したと想像される。必然的に、彼ら先住民の生命維持形態は自然の変化と共にあった。即ち、そこに生れた生活様式や社会組織はこの自然環境と密接に関連していたものとみられる。しかし、以後この関連性は時代と共に薄れつつある。

以後の歴史を概観すると、18世紀末キャプテン・クックのハワイ発見(?)、宣教師の布教活動と住民への教育、捕鯨基地化、軍事基地化、また白人農場主の進出などがこの地で起きた歴史的事実であろう。プランテーション農業のため、多くの労働力が必要になった。中国人、日本人をはじめ異文化からの人々がこの島嶼に移住してきた。これらの歴史的事実は原文化を変質せしめるに十分なインパクトをもたらしたであろう。この変質過程は現在も進行中である。このことについては、多く書かれているのでここでは触れない。しかし、結果として、現在では多民族複合文化共存の島となり、生活手段は西欧化し、経済的には西欧化当初からの観光事業依存体質が続いている。時代の流れと共に真っ先に撤退したのは捕鯨であった。鯨油による灯火にかわって石油資源の利用がすすみ、捕鯨の必要がなくなったからだと言われている。一方、軍事基地としてのハワイは現在も続いているが、農業と軍事を抜いて、観光が最高の収入源となったのは近々1972年のことと聞いている。以後、本土をはじめアジア諸国、またわが国からも観光客が押し寄せ、その観光依存体質は強化された。それに伴って、観光地独特の物価上昇、地価高騰、環境破壊、水資源の枯渇、犯罪の多発、人心の荒廃といったことが指摘されている。自然環境の劣化のみならず、人間社会も時代と共に変化するのは云うまでもないことである。それが進歩なのか、或いは劣化を伴う退歩なのかは後世の判断に委ねなければならない。

その地の気候は、冬12月から2月までやや雨が

多い程度で、四季の気温変化は少なく、一年中安定した天候に恵まれている。このような自然条件と、観光用につくられたパラダイス・イメージがハワイを観光地として世界的に有名にした理由であろう。観光以外に依存できる産業基盤がなかったハワイにとってそれは当然の帰結である。最近の問題は、ハワイでの観光客の消費活動が、期待する程には財政に反映していないことである。昨今の不況の影響は深刻と云ってよく、比較的景気のよい米本土からの観光客をのぞいてアジア諸国からの客は激減したと云う。いずれは回復するであろうが、これはハワイの観光依存体質を示すものであろう。また一方、自然生態系と人間活動のアンバランスの例として、私の知るかぎりではあるが、1999年には水不足が発生している。この時はどうやら克服できたようだが、ハワイ諸島は明らかに閉鎖生態系であることを示し、自然環境のバランス能力を超えた水の消費が問題であることを示している。

閉鎖生態系内の生命維持システムの膨張によって発生した問題とも思えるが、現在のところまだそのような生態学的な考えは一般的でない。過去を振り返るとハワイが多くの特産を得られるのは、その自然条件が利用できた場合に限られている。ハワイ島の宇宙観測施設群、海洋科学研究施設などは一つの例であろう。しかし微々たるものである。また観光業もハワイの温暖な気候という自然条件に依存している。

この島嶼は社会生態系としてみた場合、「文化」や「風土」という概念でも捉えることができる。即ち、一つの文化圏と考えるわけである。多くのハワイに関する著書は、原文化を扱い、その維持の大切さを述べている。その裏には適当数の人間が住む自然生態系が仮に最もバランスのとれた人間—自然環境関係とした場合、西欧技術文明の浸透と共に、そのバランスがとれなくなってしまったことへの反省が滲みでている。即ち、文化の破壊と再生による変質、そして風土の破壊がおきており、今の言葉で云えば環境破壊と云うことになる。

このような事例はわが国内にも多く見られる。例えば、かつてよく云われた東京一極集中化、また東海道メガロポリスという人口集中地帯の生成

は全国の人口分布をゆがめ、いちじるしい都市化傾向を生じさせた。反面、過疎地帯では高齢化が発生した。今や少子高齢化現象は全国に及び社会問題となっている。勿論、大都市と地方の間は交通手段によって結ばれているが、問題は移動の動機である。若い世代の盆暮れの帰省は別として、身体が不自由になった高齢者が、それを押してまで移動することはありえない。そして過疎地帯の地盤沈下は進みつつある。そこで衰退する過疎地帯では地域おこしと云う考えが一般化した。多くの場合、ここには観光的動機が見られる。この点、ハワイはわが国の流れの先を進んでいると云えよう。

このように人為的に形成された社会的動機によってもたらされた移動は少なくとも人間と自然環境系の関係を偏向させるものと云える。その偏向は自然生態系循環機能の劣化を促進する。しかし筆者にはこのことを全面的に否定することはできない。ただそれはどうにもならないから否定できないのであって、理念的には回復すべきと思う。

一般に環境維持と人類の生命維持といった対立する概念の間で解決策を得るには、自然生態系のバランス維持と共に、社会生態系のバランス維持の両者を考えねばならない。本来、社会は人間の生命維持システムそのものであることをわきまえて、両バランスを調整することが大切である。この複数のバランスを調整することは中々むずかしい。それは、人間が高齢段階に達した時、複数の機能がそれぞれ異なるペースで低下した結果、全体機能がじわじわと低下して行くのを何とか回復させようとするのに似ている。

ハワイはわが国土に比べると小さく、それ自体で自然循環を営むとするとごく僅かの人々しか生きることができない。西欧的な科学技術を基盤にした社会システムを使うと相当多数の人々が生活を享受できる。しかし、その為には他からの物質・エネルギーと共に、人間の循環が必要となる。それが移民の導入や観光事業と云うことになってしまうのであろう。

人口問題と自然循環生態系について

マルサスの「人口論」にもどるまでもなく、1973年のローマ・クラブの「成長の限界」や1992年の国連人口会議等を見ても地球環境問題の基礎には人口問題があるのは現在では常識となっている。1995年に地球人口は58億人であったが、1999年11月には遂に60億人に達した。

これらは人の数なのだが、閉鎖生態系内では特に密度が問題となる。大都市集中など高密度環境は自然生態系にとっては大問題である。集中しないと生命維持が計れないような社会構造、産業構造自体が問題となる。この点、些細な例であるが、ハワイで聞き及んだことは日系人と中国人の例がある。彼等の子弟は、良い職を求め、競争社会の中で生きぬくために本土の大学を目指す。そして安定を求めて本土に定着する。勿論、多くの子弟はハワイに残るのは云うまでもない。この地での労働力の中に組みこまれるのは当然である。そして若手労働力の世代循環のためには、新たな労働力がフィリピンなどから移住してくる。この種の人口移動は、わが国の場合、地方から大都市への移動という形をとる。必ずしも似ているとは云えない現象ではあるが、生存の機会を求めて移動を繰り返す人間の活動には逆らえないものがある。

1999年8月1日のNew York Times 日曜版に“Empty Isles Are Signs Japan’s Sun Might Dim”というNicholas D. Kristofの小論文が掲載された。日本の人口高齢化、労働人口の減少、地方の人口過疎化と高齢化、さらに少子化などを扱った記事である。日本の場合、アメリカのように必要な労働力の獲得のために他国から移民を受け入れるわけにはいかないことも指摘されている。しかし、最近では研修生として多くの人々が来日し、労働に従事している実態はテレビなどでも報道されているが、それは正規の移民としてではない。即ち、日本への定着は前提とされていないのである。

我が国の場合、急速な人口高齢化が喧伝されてはいるが、それは十分に予測できたことでもある。また少子化も家族形態が変わった戦後当初から予測できたことでもあった。多少なりとも予測制御が可能な社会システムを組みこんでおくべきであったと思う。これは国家という社会生態系

の維持には大きな問題だと思う。我が国の場合、自然の世代循環、即ち再生産のみを次世代供給源としており、人為的対策は導入されていない。この *New York Times* の記事の裏には、日本人は将来の日本社会を一体どうするのであるかと云う疑問がありありと見えた。この点、ハワイでは移民の導入や民族の融合という方法が残されていると云う。

日系人社会の経年変化と高齢化

ここでは日系人の歴史を論じるつもりはない。しかし、聞き及んだ限りでは、ハワイ全体の人口高齢化は指摘されて久しいと云う。しかし移民によって労働力を確保しており、問題は重篤ではないとのことである。このことは世代人口、社会階層間に、また地域間に流動性を許す余裕があり、循環移動が可能な社会システムが採用され、それが認められていることになる。社会システムを人間の生命維持システムと考えると、日米のその差は大きい。アメリカでは人は流れるのが前提であるが、日本では人は留まるのが前提とされているようである。勿論、アメリカにも定着型の社会や地域はあるが、要するに、生き方が違い、目標とする生活価値観が異なることになる。

我が国はかつて、世界に例を見ない経験をしたことがある。それは後世云うところのいわゆる「鎖国」である。結果として自ら国を閉ざし、外国の影響を遮断し、300年もの間、階級や身分、社会的役割を固定化し、閉鎖型自然生態系の中に社会システムを構築して、独特の文化を醸成してきた。歴史を読むと、よく時代による人々の生活の特徴が書かれている。徳川時代ではこうだったが、明治時代ではこう変わってしまったと云った類である。これも観方によっては正しい観察なのかもしれない。しかし何を契機として1年で変わったのか、100年かかって気がついたら変化していたのかによっては結論は変わってしまう。同じ環境の中で生活している以上、閉鎖系の中で醸成された人間の生活習慣などは、意図的に拒否しない限り、短期間で一変するとは考えられない。問題は一体、日本は何年かかって西欧化し、何が残り、何が消え去ったかということになる。

しかし移住などによって生活環境が変わるとどうであろうか。かつて1950年代に、ロスアンゼルス日本人街に宿泊した折、日系人の使用する日本語の古さに驚いたことがあったが、同じ経験をした人も恐らく多かったと思う。当時は戦前からの一世、その子供である二世の時代であったが、日本からの影響が遮断され、内部循環のみの社会的閉鎖系ではこのようなことが起るのかと思ったことがある。これは言葉(あるいは日本語の方言)の問題であるが、ましてや生活上の癖、伝承された習慣、常識とされているような思考方法や感情的な反応などは、表面的には変わったように見えても、基本的にはそうかわらないものと思われた。

かつてある夏、ヨーロッパ在住日本商社駐在員の子弟の教育問題を視察したことがあった。彼等の多くは日本語がごちなく不自由であった。しかも観察するところ感性、理性ともに日本人離れしており、帰国することがはたして当人の将来にとって、幸せか否か判断に迷った覚えがある。外国駐在経験のある私と同年配の友人の子弟も皆そのようで、子供を残して夫婦のみで帰国した例も多い。これらは一見矛盾しているように見える例であるが、僅か一、二世代でも、何が残り、何が消えるのかを考えさせられる経験であった。

そこでハワイ在住の日系人を考えてみる。第二次大戦開戦の折、アメリカにいる日本人はわれわれに協力するはずと信じていた軍人が多かったことを何かで読んだことがある。戦争相手を知らなかった軍部の愚かしさとも思えるが、現在でも基本的には日本人の東洋人に対する認識は変わっていないと思う。顔が似ているとわれわれと同じと思うのは、非常に危険なことであろう。誤解に基づいた認識を促進してしまうからである。

生き方につながる社会規範を見ると更に大きな差が見られる。日本人の場合、どちらかと云えば、相互に依存する傾向が強く、あたかも家族内の依存心のようなものをグループ内の他者にも抱いているようである。教育すらもが同族意識を是認した集団造りをしている。門閥、上下関係、学歴重視など、その結果であろう。上位者に対して弱く、徒党を組んで強くなるのも、その結果かもしれない。外国で日本人の集団を観察する機会が多い

と、どうも古い生き方そのままのようにも思える。要は個人の確立が十分でなく、その弱さに起因するものであろう。専門でないので詳しくは述べられないのが残念である。

狭い生活範囲の中で適当な大きさの循環の見られない社会システムに長期間定着すると、この閉鎖社会システム内での僅かな人間関係という循環のみに慣れてしまうらしい。アメリカに在住する現在の日系人は、日本に住む日本人と異なるのは当然のことだが、どうもこのような社会生態系、即ち、数世代に及ぶ生き方の差によって出来上がったものようである。世代の数え方は移住時期、結婚、出産、その年代など多くの要因が絡むので一概には云えないが、現在まで数世代経過したと考えておく。当然、当初は古い日本人社会の強烈な特徴をもっていたであろう。そして、世代がすすむにつれて日本人社会の独自性は希薄になったと考えるのが自然である。この独自性形成の裏には、地域の閉鎖性、独立性、会員のもつ価値観や生き方の共通性、他人の受け入れ拒否、異端者の拒絶、ライフスタイルの共通性、と云った社会としての纏りを示す条件がある。それらは環境、時間経過、世代移行に伴って次第に崩壊するものと思うが、他の研究者にゆだねなければならない。

日系人の価値観の流れにみられる変化

上述のような自然生態系をもち、人間・社会システムに特徴をもつハワイでは多くの民族が共存している。彼らの持つ価値観は時代の推移とともに、また世代がすすむにつれ変化すると思われる。どう変わったかについては専門家の考察に待つとして、ある日本学者の講演から日系人が閉鎖型自然生態系であるハワイで、他民族に囲まれた日系人社会と他民族との共通社会の両者と関係しつつ両親から与えられた価値観をどのようにして受けついできたかを考えてみたい。

たまたま、1999年8月20日、ハワイ日米協会主催のハワイ州立州40周年記念講演会が開催された。それは「ハワイ移民達の体験とその意義について」(The Values of Japanese Immigrants in Hawaii)と題するハワイ大学のGeorge Akita名

誉教授の講演会である。幸い聴講することができたので、そこで示された日系人像を通して彼らの価値観を探ってみることにする。以下、私見を述べながら講演のメモに基づいて話しをすすめてみたい。

ハワイ日系人の価値観の根源は明治期の日本人、特に女性の価値観にあったと云う。あるいはそれ以前の徳川時代末期の価値観にはじまるとも云えよう。黙々とした勤勉さ、矜持と犠牲的精神にその根源があると彼は云う。即ち、社会にたいする義務感、自己のもつべき責任感、生活における勤勉さ、何よりも名誉を重んじ、強靱な忍耐力をもった人々である。彼らは先人の恩を知り、その中から人間の理想像を描き自己の練磨に励んできた。このような価値観、道徳観は脈々として二世、三世の生活態度に受け継がれたと云う。もし日本人が過去においてこのような価値観にもとづいて個人の確立を図ってきたものとするれば、これも一つの解釈であるが、モンスーン風土に培われた適応型精神の表れとも云えよう。即ち、モンスーンによる季節変動、それが陸上にもたらす水の循環、その中で生育する植物を中心とする生態系によって特徴づけられる環境内での調和的な生き方である。それは水を含めた物質の「循環」を基底におく考え方である。苦しい時もあればいずれ楽しい時もおとずれるといった式のものであろう。それを受け入れた時、循環する自然と調和し、環境変化に対して受容的な、且つ長期的な忍従を基本とする生き方が生まれる。戦後、これらの価値観のすべてを忘れ去った現在の日本人にとっては想像もつかない生き方かも知れない。

このような日本人が何ゆえに遠く故国を離れ、はるばるハワイに移住したのであろうか。彼らは、よく云われているように生活に困窮した結果なのであろうか。その本当の理由を現在探ることは不可能に近い。教授は山県有朋の専門家として有名な方であるが、当時の資料から1885年日本政府とハワイ王朝の合意で2万人がハワイに移住したことを述べられた。しかも後に、当時の満州国(1932年建国)への移住が盛んになると2000人もの人々が希望を求めてハワイから満州に再移住したことも指摘された。即ち、当時の日本における国家と国民の関係は、現在とは大変異なっていた

ことになる。日系人のルーツは決して棄民ではなく、よりよい生活を求めて、新天地に飛躍した人々であったとも解釈できる。

そして日本に比べて収入がよい仕事がハワイにあったからだと云うことになる。日本人移民のもつこのような気風は昭和30年頃にも残っており、私の渡米時、移民船内での観察もそれを裏付けるものがあった。ましてや明治初期の日本人はもっとおおらかで冒険心にも富んでいただろう。冷静に考えてみると、政策的な棄民と考えるのは非現実的である。当時の日本が他国に比べ相対的に貧しかったために、高額な船賃が払えた移民への嫉妬心を示したものかも知れない。現在はさておき明治初期の日本人は貧しいながらも、或いは貧しいが故に、自己にこだわることなくおおらかで冒険心にも富んでいたのだろう。

徳川時代、一般庶民は意外に移動の自由があって、飢饉になれば村から街へ出稼ぎにでるのも当然であったと云う。また子供は寺子屋で読み書き、算盤を学び、文盲率は日本で1.2%、当時アメリカでは24%であったことはハワイ日系人のルーツとしての当時の日本人の教養水準や日本社会を知る上でも重要である。またよく日本人の性格は従順であると言われているが、筋の通らぬことには実に闘争的であったことも指摘された。第二次大戦中の日系兵士の活躍はそのことをよく示している。第二次世界大戦時のわが国の軍人ではなく明治時代、日清・日露戦争を闘った日本人そのままのように思えるのは私ばかりではあるまい。このような精神的風土に培われたのが、二世、三世、であったことになる。

教授が述べられた日系人の価値観はそれとして、私の経験からみると、かつての日本人はすこぶる禁欲的であったと思う。即ち、自らを律する規範が世代を超えて伝承されたことになる。モンズーン風土がそれをもたらしたのか否かは別として、かつての日本人の貧しさを貧しさと思わぬおおらかで、また謙虚な生き方だったのだろう。

西欧化と共に価値観が多様化した現在、自らを律する規範などと云うと笑われるかも知れない。しかし、日系人にとっての「公」の規範はアメリカ社会のそれであり、「私」は自らを律しようとする個人である。その「私」の中に日米の規範が

混在していると思う。明治以来の価値観が日系人個人の中にどの程度残っているのかは分からないが、今になっては想像する以外ない。

だが彼らは子弟を育てることの重要さを身にしみて理解している。家庭でのしつけや教育を重視すると共に、子弟に自分が受けてきた以上の教育を与えようとした。その結果か、日系人は現在でも中流階級に甘んじていると云う。優秀な素質を培われた子弟は米本土の有名大学に指向し、本土で成功をおさめた次世代はハワイには帰ってこない。結果、高齢になった父母を米本土に迎える例が多い。これほど親子の絆を示すことはないであろう。しかし、人口学的に見れば、これは人口流出である。過疎化と高齢化が必然的に発生する。そのためか、意外にハワイに残された孤独な高齢者も多いといわれている。この現象は我が国の僻地では既に始まって久しい。ただハワイではその流出労働力を補填するのは他民族の若手の移民であるが、我が国では補填されず過疎化が発生することになる。

クアキニ医療センターにいる高齢者は女性が多い。勿論女性のほうが長寿なのは洋の東西を問わず、一般的な傾向であるが、ハワイでは60歳以上の人口がすでに過半数を占め、その中でも80歳以上の女性が55%を占めているとのことである。即ち、高齢化社会なのである。日系の高齢女性でも現在では二世、三世が多く、日本語で話すことはまれである。しかし気配り、表情の動き、立ち居振舞いには随所にかつての日本人女性を感じさせるものがある。それを感じられるのは私自身の属する世代の故かもしれない。これはあくまで感性の世界のことである。当然のことではあるが、このようなことは心理調査をもって客観的に結論づけられないだろう。私の偏見と云われればそれまでであるが、世代の特徴を「感じる」とはこのようなことであろう。若い面接調査員にはそれを感じられる基礎経験は恐らくない。いずれにしても、昔、一世の持ちこんだ日本文化、特に精神文化を墨守しているのは、さまざまな価値観や異質精神文化が導入されたわが国現代社会に身を置かれわれには懐古の情すら感じさせる。それは消え去りつつある価値観とは云え、日本人が失った一本のすじを感じさせる。

現在ハワイに居住する若い日系人の精神構造は恐らく George Akita 教授や私などの世代とは大変な距離があると思う。中には彼が指摘したような性格をもつものも残っているであろう。日系人ということで、他の教授から回されてきた学生の中にも非常に日本的なしつけの行き届いた人がいたので、聞いてみたところ親は三世とのことであつた。しかし、当然ながら全くその痕跡すらとどめない者も多い。日系人社会全体としてみると、やはり日本人的な特性は希薄になっていくのが自然であろう。それがハワイという閉鎖型自然環境系に住み、現代アメリカのもつ価値観によって生まれ、それらを自然に受け入れている人々にとっては当然の生き方でもある。

おわりに

さてこの小論を終えるに当たって、まとめをしなければならぬ。

第一に、閉鎖型生態系の内部での物質・エネルギー循環が想定される環境としてのハワイは、生存環境としては明らかに有限である。

第二に、循環が前提とされる過程で、もし何らかの理由で固定してしまった生命維持システムは、次第に劣化することによって機能不全に陥りやすい。何らかのインパクトによって生命維持システムを大幅に変化させると、その過程でシステムは徐々に変質・再生するようである。

第三に、西欧化という変質・再生手段をとった以上、それを進める以外社会システムの維持は困難であるとする、物質、エネルギー、更には人間をも含めて物質的価値の流入・流出を前提とせざるを得ない。単なる循環系ではなく、困難な微調整が必要なダイナミックなシステムに変化する。これが発展型社会システムの宿命のようである。

と云ったことが考えられた。

社会をこのように機械的なシステムとして考えることは、いささか逡巡するのであるが、最後に説明した世代による規範や価値観の変化、即ち、各世代の生き方の変化傾向は生命体の環境への適応過程でも当てはまる考えである。そう考えると、「人間」の変化、精神的な変質には少なくとも

も数世代を要すると考えられる。

ふりかえって、現下の世界情勢をみると、民族の独自性を主張することはあっても、融合を計ることは正義とはされていない。結果、民族紛争は絶え間なく発生し、国は住民の生命維持すら保証しえないというのが現状である。更に、環境は破壊され、生態系の維持は困難になりつつある。西欧文明に基盤をおく科学技術の進歩により、人間の生き方が大幅に変化した例は多く見られる。明治以降のわが国もその例である。西欧諸国と同様であるが、多くはそれぞれの国の歴史に記録されている。ハワイでの変化はまだわれわれ世代の視程の中にあるので、敢えて、私の現在研究している閉鎖生態系生命維持システムの考えからまとめてみた。

アメリカ本土でも民族間軋轢は多発している。ハワイは本土と異なり、閉鎖生態系と考えられることは既に述べた。この島々に住む人々は文化的軋轢よりも文化的共存・共生こそが生きる道であることに気づいている。この点、学ぶべきことが多いと思う。この地では、更に数世代たてば新たな移住者は別としても、民族的融合は意外に早く訪れるのではないだろうかとも思う。しかし、自然生態系は人間の生存活動によって劣化するのが普通であるので、将来、この環境がどのようになっていくのかと思う。

この小論を纏めるに当たっては、1999年夏にハワイ滞在中、8名の日系人と個別に討議した。氏名は記さないが、ここで改めて感謝の意を表したい。

以上

A Closed Type Ecological System Influenced by the Western Progressive Type Social System from the Viewpoint of Changing Value Observed among Japanese Americans in Hawaii

ABSTRACT

This essay describes the author's attempt to analyze human values in the closed type ecological system of the islands of Hawaii from the viewpoint of conflict between a closed ecological circulatory system and the influence of a modern western social system. Those two systems can only exist under the assumption of the movement of materials and even of humans. In connection with the above idea, he also discusses the change of inherited norms, values, and habits brought from the previous generation and what can be inherited and is disappeared in the next generation during the course of western influence.

Key words: Closed type ecological system, Progressive type social system, Qualitative change in society, Human behavior patterns, Social norms and values.